

# 新・下野市風土記 華麗なる一族(2)



下野市教育委員会 文化財課

## 前回までのあらすじ

前回、下毛野朝臣古麻呂の中央政権での活躍について、少しだけ紹介しました。文武天皇4(700)年に大宝律令の選定の任を受け、作業に当たりました。それまで、天武天皇(在位673~686)のときに制定された飛鳥浄御原令がありましたが、「令」とセットになる「律」が完成していなかったようで、改めて大宝律令が編さんされました。では、律と令とは?現代の法に例えて、律は刑法、令は憲法となります。これに「格」(現行法令集)、「式」(役所のマニュアル)と解説されています。

## 大宝律令編さんプロジェクト

律も令も中国に例があり、隋や唐といった中国王朝の事例を参考に日本風にアレンジしたわけでは、古麻呂を含めどのようなメンバーが関わっていたのでしょうか?現代の表現を借りれば「プロジェクトチーム」のメンバーとなります。このプロジェクトには、19人のメンバーが選出されました。主宰には、天武天皇の9番目の皇子である①刑部親王(705年没)、実務管理者のような立場に②藤原不比等(659~719)、作業主任のような立場に③粟田朝臣真人(719年没)と④下毛野朝臣古麻呂(709年没)、以下、作業担当者として⑤伊岐(伊吉)連博徳(生没不詳)、⑥伊余部連馬養(703年没)、⑦薩弘格(生没不詳)、⑧土師部宿禰甥(生没不詳)、⑨坂合部宿禰唐(704年没)、⑩白猪史骨(宝然)(生没不詳)、⑪黄文連備(712年没)、⑫田辺史百枝(生没不詳)、⑬道君首名(663~718)、⑭狭井宿禰尺麻呂(生没不詳)、⑮鍛

造大角(生没不詳)、⑯額田部連林(生没不詳)、⑰田辺史首名(生没不詳)、⑱山口伊美伎大麻呂(生没不詳)、⑲調伊美伎老人(701年没)。①~⑤までが五位以上の貴族相当の官位者、⑤は、遣新羅使で唐・百濟からの使者の対応をするほど語学堪能。⑧は「大唐学生」いわゆる遣唐使と一緒に遣わされた学生。新羅経由で帰国した経歴。⑨の一族は大宝元年に遣唐使として派遣。⑩も天武13年に大唐学生として唐に渡り、新羅経由で帰国。⑦⑩⑪⑫⑬⑮⑯は渡来系氏族出身。⑦は渡来一世の音博士(楽人)。⑪は高麗系氏族で画使(絵師)、壁画古墳などに関与しているかもしれません。⑫は最終官位が大学博士で子孫に万葉歌人がいます。⑬は和銅五年に新羅大使として派遣。「懐風藻」に歌が残されています。⑮は渡来系の韓鍛冶部出身。明経第一博士の称号も得ています。⑱は東漢氏系の豪族。⑲は百濟系、東漢氏系と推測されています。

## プロジェクトに関わった人々の経歴

この中で、鍛造大角が律令(法令)に、粟田朝臣真人が経学・史書に詳しい人材と考えられています。また、上記したように入唐経験者として伊岐(伊吉)連博徳、土師部宿禰甥、白猪史骨(宝然)のほか、薩弘格のように唐からの渡来人や渡来系氏族を重用したのは、海外事情や典籍に明るい人材を登用したと考えられています。これらの関係者は、大化(西暦600年代中頃)以前の渡来人、天智2(663)年の白村江の戦いに代表される百濟滅亡期頃を中心とした亡命者系渡来人、奈良朝直前期の渡来系氏族としても分類することができます。

下毛野朝臣古麻呂は、これらの人々に混じって藤原宮で活躍したわけでは、謎ですが、持統天皇元(687)年には「高麗の人を常陸国に移植し田を与えた。」また、同年、「新羅人14人を下野国に移植し田を与えた。」という記録があります。古麻呂の没後になりますが、霊龜2(716)年5月には駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野7国の高麗人1,799人を武蔵国に移して高麗郡を設置した記録があります。ここからも、いかに渡来人が東国にも多く在住していたかがわかります。